

令和六年度 専修大学附属高等学校入学試験問題

国 語

注意

- 一、試験時間は五十分です。
- 二、問題は一ページから十五ページまでです。
- 三、答えはすべて解答用紙の指定の欄に記入しなさい。
- 四、答えを書きなおすときは、きれいに消してから新しい答えを書きなさい。
- 五、問題用紙も、試験終了後回収します。

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題の都合で改行や小見出しを省いたところがある。(解答は全て句読点、記号も一字に含める。)

年末年始になるたびに、若い頃の私は毎年のように大阪へでかけては、朝日座で文楽を見るのを、楽しみにしていた。人形舞というものに、私は魅了＊1されていたのである。

私の郷里の山梨には、傀儡＊3という放浪の芸人が舞わせていた人形舞の古い形態が、「天津司舞＊2」^①という名称で、伝えられてきた。私は少年の日に、この人形舞から強烈な衝撃を受けた思い出がある。

天津司舞では、大人でも一抱えにあまるほど大きな数体の人形を持ち上げて、田んぼ道を静々と行進してきたあと、境内＊4に設けられた幕圍いの内で人形を舞わせる。舞わすといつても、とりたてて変わった所作しよさがあるわけではなく、大きな人形がゆらゆらと空中を動いていく姿を眺めるだけである。

それなのに、この人形舞は子供の心に大きな動揺をもたらした。この世ならぬ存在が、人形の姿を借りて、この世にあらわれている。その存在はゆらゆらと揺れながら、この世を抜け出して、人間の儂い業はなを見下ろしている。

私はそのときはじめて、神の視線というものを実感して、震え上がってしまった。人間の世界を離脱した「目」が、じつとこちらを見つめている感覚である。そのとき以来、私は古いライレキ＊4を持つさまざまな人形遣いの芸能の虜ちりとなった。文楽にたいする強烈な関心は、そこから発している。

傀儡のおこなった人形遣いの芸能には、人間の世界を抜け出して、遠い視線から人の世を見下ろしている、神の視線のようなものが感じられる。同じ遠くからの視線は、文楽のなかにもはつきりと感じ取ることができる。そのことをまっさきと感じさせるのが、幕開けを告げる「東西声とうざいこゑ」だ。黒子の衣装を身に着けた東西声は、「とざい。とーざい」という呼び立てに続いて、本日の演目と演者の名前を告げて、そのままずっと奥に引っ込んでいく。

すべての語尾を下げないという決まりにしたがって、東西声は非人間的な一本調子で、観客の心を人間臭い世界から離脱させていく。非人間的といっても、コンピューターで合成した機械の声とはちがって、人間の内部から外に離脱してきたものの放つ声である。

人形を抱えて登場した人形遣いが、その人形を操りはじめる。＊らたゆう 太夫の語る物語に合わせて、人間そっくりの動きを見せる人形のほうに観客はしだいに同化しだす。すると奇妙な逆転がおこる。人形を操っているのは素面＊そすめんの人形遣いである。つまりは人間である。ところが人形と一体化してしまった観客には、人形遣いが自分の運命を操っている外部の存在のように感じられてくる。

人形は私たち人間と同じに、運命の神に操られて、つぎつぎと起こる不条理な出来事に巻き込まれ、死にむかってひた走っていく。ここで演じられている人形の芝居の構造は、私たちの人生を突き動かしているものの仕組みと、そっくりではないか。私たちもこの人形と同じように、見えない運命の神に操られ、とうてい納得することなどできない人生の不条理を走り抜けている存在なのではないか。

文楽はこのように人間の外にあって、遠くから人間を見つめている視線の存在を感知させる力を持つ芸術なのである。素面の人形遣いと人形の関係も、黒子と人形の関係も、すべてが人間の世界から離脱している視線を生み出すために考え出された仕掛けである。その視線の主は、神と呼んでもいいし、またとりたててそう呼ばなくてもいい。

自分という意識の外に脱出して、自分を遠くから見ている視線を獲得することで、人間は自分という存在の儚さを悟ることができる。これはすべての偉大な芸術に備わった特質である。文楽は原始的な傀儡の人形劇から発達してきた大衆的な芸能でありながら、この意味でも偉大な芸術としての本質を備えている。

日本人は超越者としての神を持たなかったが、傀儡人形のような仕掛けを通じて、人間の世界を離脱した「目」を持つことによって、自分たちの無明むみょうの生を外から照らし出そうとしてきた。この「目」は人間性を離れた、非人間の「目」

である。非人間の「目」は、すべてのものを平等に照らし出す。えこひいきも*7 忖度もなく、おセンチな同情もしない。期待もしないし失望もしない。しかし人間の世界から少し離脱しているだけで、完全に超越しない分だけ、ジヒ心にはあふれている。

この非人間の「目」という鏡に、自分の人生をウツし出して考えることが、この国の哲学である。人間の間柄の中にすっぽりはまったまま、倫理的な判断を続けていても、堂々巡りをするばかり、私たちの世界はどんどん息苦しくなっていく。そういうとき、世界を離脱した非人間の「目」に見つめられていることに気づくと、心は軽くなる。なあと、私たちの人生など、たいしたものではないさ。人間は非人間性の大海に浮かび上がってきた泡のようなもの、だから大まじめにやることもないと、文楽人形は語りかけてくる。

中沢新一『今日のミトロジー』（講談社選書メチエ）

- * 1 朝日座…かつて大阪府中央区にあった劇場。
- * 2 文楽…操り人形を用いた伝統芸能の一つ。
- * 3 傀儡…操り人形。また、人形を操る人形遣いのこと。
- * 4 黒子…全身黒い衣装で身を隠し、舞台上で様々な手助けをする人のこと。
- * 5 太夫…文楽では、舞台上で物語を語る人のこと。
- * 6 素面…面をつけていないこと。文楽では人形を三人の黒子が操るが、そのうち一人は顔を出して操る。
- * 7 忖度…他人の心中や考えを推し量ること。
- * 8 おセンチ…「センチメンタル」の略。感傷的になる様子。

問一 傍線部 a、e の漢字は平仮名に、カタカナは漢字に改めなさい。

問二 傍線部①「強烈な衝撃を受けた」とあるが、これはなぜか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア さまざまな人形遣いの芸能に興味を持つきっかけとなったから。
- イ 大きな人形に細やかな動きをつける高度な技術を目にしたから。
- ウ 人形を通してこの世にはいないはずの神の視線を実感したから。
- エ 大阪へ出かけるという非日常的な出来事に気分が高揚したから。
- オ 人形の登場によって日常の風景が見慣れないものになったから。

問三 傍線部②「ゆらゆら」の品詞名を答えなさい。

問四 傍線部③「奇妙な逆転」とあるが、なぜ筆者はここでおこる逆転を「奇妙」だと述べているのか。その理由を解答欄に合うように、三十字以上四十字以内で答えなさい。

問五 傍線部④「この国の哲学」について以下のように説明した。空欄 に当てはまる語句を本文からそれぞれ指定された字数で探し、抜き出して答えなさい。

日本人は の視点を持たなかったが、代わりに傀儡人形のような の「目」という仕掛けを通して自身を見つめ直すことで、 を悟り、無明の生を照らそうとしてきた。

問六 傍線部⑤「人間は非人間性の大海に浮かび上がってきた泡のようなもの」とあるが、ここで用いられている表現技法として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 直喩 イ 擬人法 ウ 対句 エ 倒置法 オ 押韻

問七 本文における「文楽」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「文楽」に関する説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 東西声は抑揚に富み、これから始まる物語への期待を高める役割を持つ。
- イ 東西声は機械のように抑揚のない声で、当日の演目と演者の名を告げる。
- ウ 太夫の語り是一本調子で、観客を非現実的な空間へと導く役割を果たす。
- エ 太夫の語りと精妙な人形の動きにより、観客は作品に引き込まれていく。
- オ 作品の中の出来事を通し、観客は日常生活にも生かせる教訓を得られる。

(2) 筆者は「文楽」をどのようなものだと考えているか。本文から三十九字で探し、初めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

問八 本文からは次の一文が抜けている。この一文が入る箇所を探し、その直後の五字を抜き出して答えなさい。

この様子を固唾かたずを呑んで見守っている観客は、そのとき人生の真理を悟ることになる。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題の都合で小見出しや一部内容を省いたところがある。(解答は全て句読点、記号も一字に含める。)

伝統的な友情観——すなわち、互いに自律した個人の間で交わされる、古代ギリシャに由来する男性的な友情——において、友達同士が互いを「わかり合う」ことができるのは、「私」が自分と似た人間と友達になるからだ。そのように自分と似た人間と友達になるために、「私」は自分が何者であるかを理解しなければならぬ。「私」が自分のことを理解していなければ、友達が自分に似ていることもまたわからないからである。友達と「わかり合う」ためには自分のことが「わかる」のでなければならぬ。たとえばアリストテレスは、自分自身と友達になることから、他者と友達になることが可能になる、と考えていたが、それは自分のことが「わかる」からこそ他者のことも「わかる」というロジックである。

それでは、そもそも「わかる」ということ——理解すること、あるいは認識すること——とは、いったい何を意味しているのだろうか。それに対してニーチェは次のように答える。すなわち人間が何かを認識するということは、未知のもの^aを既知のものに置き換えることである。

どういうことだろうか。

I、「私」がドイツに旅行して、そこでシュニッツェルという未知の料理と遭遇したとする。「私」にとってそれは人生ではじめて出会うものであり、食べてみるまでどんな味かわからない。つまり認識できない。II、それを一口食べると、その食感や食材の調理法から、「このシュニッツェルというのはヨウするにトンカツのようなものだ」と「私」は判断する。このとき、「私」はシュニッツェルという未知の対象を、トンカツという既知の対象に置き換えたことになる。それによって、「私」はシュニッツェルという料理に対する認識を獲得するのである(中略)。

認識するということは、未知を既知に置き換えることだ。そしてそれが意味しているのは、未知のものも持っている新しさを、既知のものによって否定する、ということである。認識することによって、対象は自分がすでに知っているもの、見たことがあるもの、よくある他のものへと変換されてしまう。トンカツとして認識されてしまったら、シュニツェルの味わいの新鮮さはウスらいでしまふに違いない。そのようにして、認識は対象を陳腐なものにしてしまうのである。

② このような意味での認識の働きが、シュニツェルではなく、自分に向けられるとき、何が起きるのだろうか。

「私」が自分を認識するということは、自分のなかにある未知なものを否定し、それを既知なものへと置き換えることを意味する。素直に考えればそうなる。そしてニーチェは、そうした自己認識は必ず失敗する、と考える。なぜなら人間は、そもそも自分が何を考え、何を望んでいるのかを、自分でほとんど意識することができないからだ。ニーチェによれば、人間は、自分でも気づかないままに、様々なことを考え続けているのであり、そこには自分でも意識することのできない未知の部分が潜んでいる。そうであるにもかかわらず、自分のことをわかった気になることは、自分のことを誤解し、それどころか自分を陳腐なものへと貶めることを意味するのだ。ニーチェは次のように説明する。

「∴」われわれ各人は、自己自身を個人としてできる限り理解し、「自己自身を知る」ことに努める意欲をもってはいても、結局のところは、自分の中の非個性的なもの、「平均的なもの」ばかりを意識することになる。

（『喜ばしき知恵』）

このような逆説は、受験やシユウシヨク活動において、自己アピールをしたり、自己分析をしたりしたことがある人なら、誰でも経験することだろう。他人とは異なる自分のオリジナリティを説明しようとすればするほど、出てくる言

葉はどこかで聞いたことがあるようなもの、似たり寄ったりなものになってしまふ。ニーチェはすべての人間がかけがえのない存在であり、根本的なオリジナリティを持っていてと考える。しかし、それを自分で認識できたと思ひ込んだ瞬間に、そうした個性は既知の「平均的なもの」に置き換えられ、失われてしまうのである。

Ⅲ そうした自分の個性が、ずっと同じであり続けるとは限らないし、それどころか一つであるとも限らない。人間は、状況の変化によって性格が変わることもあるし、あるいは同時に ③ する二つの考え方をもち、それらが自分のなかでせめぎ合うこともある。このような特性もまた、自分を認識しようとした途端に、^e 覆い隠されてしまうのである。

人間には、自分でも気づいていない個性があり、その個性は変わりうるものであり、そして多様でもありうる。このような考え方は、人間の人格のうちに、単一で、不変で、誰にでも理解できるような個性があることを否定するものである。人間には自分のことなど認識できない。「私」には自分を誤解することしかできない。そうである以上、「私」が自分と似た他者と友達になろうとしても、「私」はその他者のことも同じように誤解してしまふ。こうした発想は、友達を「もう一人の私」として説明したアリストテレスの友情論を、その根本から批判するものである。

このことは、決して、本来なら「私」は他者を理解できるはずなのに、誤解してしまふ、ということの意味するわけではない。そもそも私たちには ⑥ に他者が理解できないのだ。たとえば、「私」がどんなに友達のことをわかった気になつていても、友達には、「私」からは決して見ることでできない、決して知る由もない部分が潜んでいる。ニーチェは次のように述べる。

友人について。——まあ一度君自身を相手によく考えてみるがいい、もつとも親しい知人の間でさえ、どんなに感覚が違うか、どんなに意見がわかれているかを、同じ意見でさえ君の友人の頭の中では君の頭の中とは、どんな

にまるでちがった位置や強さをもっているかを、誤解や敵意ある離反へのきっかけが、どんなに多様に現われてくるかを。

〔『人間的、あまりに人間的』〕

ずいぶん辛辣しんろうな意見のように聞こえるかも知れない。夢も希望もない、人間らしいやさしさを欠いた考え方のよう
思われるかも知れない。

しかし、ニーチェの立場に従うなら、本当は友達を誤解しているのに、友達をわかった気になることの方が、はるかに友達に対して失礼な態度⑦ということになる。なぜなら、そのように友達をわかった気になることによって、「私」は友達もつ未知の部分を否定し、既知のものに置き換えてしまうからである。それによって、友達はどこ⑧にでもいる平凡な人、他の人と交換可能な陳腐なものへと貶められる。それはシュニツェルをトンカツと呼ぶことと変わらない。友達の個性を尊重しているようで、実は否定しているのである。

そしてこのことは、「私」が友達から理解される場面にも当てはまる。「私」は友達から常に誤解されている。「あなたってこういう人だよ」と友達から認識されることがあっても、「私」のなかには、その認識から零れ落ちるものが溢あふれかえっているからだ。

⑨ 「私」は友達を誤解せざるをえないし、友達も「私」を誤解せざるをえない。友達同士が「わかり合う」などということとは、幻想に過ぎない。そうであるにもかかわらず、私たちがわかり合える関係を友情の理想として捉えるのなら、その幻想は、それによって互いの個性を傷つけあい、相手に対する不信感を抱かせるような、息苦しい関係をもたらす。ニーチェの友情論からこのように考えることができるだろう。

では、友達とはわかり合えないという現実に対して、私たちはどのような態度を取ればよいのだろうか。ニーチェは

一つの実践的なアドバイスを示している。それは、友達を「軽く視る」ということである。

「軽く視る」ということは、友達を蔑ろないむにすることではない。そうではなく、友達との相互理解に負荷をかけないようにする、そこに寄りかからないようにする、ということだ。たしかに友達は「私」が理解しているのとは違う人間かも知れない、しかし、そうであったとしても何も問題ではない、そんなことはどうでもよい、という心構えで、友達と関わることだ。そのような心構えがあれば、友達とわかり合えないのだとしても、それは友情にとって支障にならない。ニーチェの人間観に従う限り、友情とはそうした軽やかな関係として理解されるべきなのである。

戸谷洋志『友情を哲学する 七人の哲学者たちの友情観』（光文社新書）

*1 アリストテレス：古代ギリシャの哲学者（前三八四～前三二二）。

*2 ニーチェ：ドイツの哲学者（一八四四～一九〇〇）。

問一 傍線部a～eの漢字は平仮名に、カタカナは漢字に改めなさい。

問二 傍線部①「に」と同じはたらきをしている「に」を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 電車の乗務員が親切にしてくれた。 イ 晴天だったが午後から雨に変わった。

ウ 勉強をしようと思ったのに寝てしまった。 エ 待ちに待った冬休みがついに来た。

オ 風邪をひかないように気をつけた。

問三 空欄ⅠⅡⅢに入る語句として最も適当なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア だから イ しかし ウ つまり エ むしろ オ しかも

カ たとえば キ なぜなら

問四 傍線部②「このような意味での認識の働き」とは、どのような働きを指すか。解答欄に合うように、これより前の本文から三十字程度で探し、初めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

問五 空欄③には、「前後のつじつまが合わないこと」という意味の故事成語が入る。適当な語句を次から一つ

選び、記号で答えなさい。

ア 矛盾 イ 助長 ウ 圧巻 エ 蛇足 オ 完璧

問六 傍線部④「覆い隠されてしまう」とあるが、それはどのようなことにつながるか。本文から十五字で探し、初めと終わりの三字を抜き出して答えなさい。

問七 傍線部⑤「アリストテレスの友情論」とは、どのような考え方か。解答欄に合うように、本文から三十字程度で探し、初めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

問八 空欄⑥に入る語句として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 客観的 イ 原理的 ウ 論理的 エ 合理的 オ 意識的

問九 傍線部⑦「失礼な態度」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 友達には「私」からは見えない多様な性質があるにもかかわらず、「私」の空想により友達を持つオリジナリティを作り上げてしまうこと。

イ 「私」の周りにいる人たちの意見をとりいれて友達の個性を判断することで、友達を没個性的な人物にしてしまうこと。

ウ 友達には「私」からは見えない性格や個性があるにもかかわらず、「私」の既存の知識を用いて安易に友達を批判してしまうこと。

エ 「私」には把握できないような友達の性格を「私」自身の性格と照らし合わせて理解しようとすることで、友達と自分を同化してしまうこと。

オ 「私」には友達のオリジナリティを捉えきれないにもかかわらず、これまでの経験から型にはめて理解しようとしてしまうこと。

問十 傍線部⑧「どこにでもいる平凡な人」と対照的な意味をもつ語句を本文から十字程度で探し、抜き出して答えな
さい。

問十一 傍線部⑨「私」は友達を誤解せざるをえないし、友達も「私」を誤解せざるをえない」という状況に対する
解決策を以下のように説明した。空欄 A・B に当てはまる語句を本文からそれぞれ指定された字数で
探し、抜き出して答えなさい。

「私」と友達が A(四字)を得ることにこだわるべきではない。たとえば、それぞれが認識している相手の姿
に違いがあったとしても、それに執着しない姿勢をとり、 B(六字)を築くことが大切である。



